

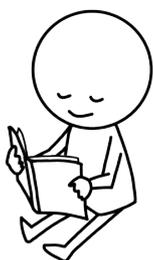
# 念々堂だより

編集・発行 念々堂  
発行者 岸上仁  
558-0055 大阪市住吉区万代 5-17-27  
メール [hello@nennendo.com](mailto:hello@nennendo.com)  
ホームページ <https://nennendo.com>  
念々堂事務局 06-6674-1181(受念館内)



暮らしとともにある図書館「念々堂」  
は、受念寺先代の住職の旧家を改装して  
造った、まちの小さな図書館です。

ちよっとコーヒーでも飲みながら、ゆ  
っくり本を読みたい。たまには気分を変  
えて、自習をしたい。今まで出会ったこと  
のないコトバに出会いたい。日常では学  
べないことを学びたい。たくさんの人と  
わいわいするのは苦手だけど、ゆるやか  
なつながりの中にいたい。こんなところ  
がほしかった——本を通して人と人がつ  
ながる、そんな場所になることを願って  
います。





# 「念々堂」 こんなところですよ

## 過ごし方

念々堂は小さな図書館です。ゆっくり見て回るだけでもいいですし、コーヒーを飲むだけでもいいです。ゆっくり本を読んでもいいし、自習やデスクワークもできます。店番にそっと話しかけてもらっても大丈夫です。店番は医師だったり、介護職員だったり、いろんな人が交代で受け持ちます。隣接する老人ホームの入居者さんも受け持ちも。みなボランティアですので暖かくお見守りください。

## 「よむ」

お飲み物を飲みながら本が読めます。学生さんの自習に使っていただいてもいいですし、デスクワークなどのお仕事にも使えます(Wi-Fiもご利用いただけます)。気が向いたら本を探してみてください。新しい本との出会いがあるかもしれません。仏教書、哲学書その他、小説やマンガ、絵本、医学書もあります。とくに仏教を勉強したい方には結構充実しているはず。



## 「まなぶ」

趣味のことや医学のこと、人生のことなど、ときには気楽に、ときには真剣に。いろいろなことを学べる場所を開きたいと思っています。会の日には、ホームページや、メール、公式LINEなどでお知らせします。イベントや教室を開きたい方はご相談ください。



## 「つながる」

本を通して人と人が世代や立場を越えてつながる場所になればと思っています。人のつながりも大事にしたいけれど、たくさん人が集まることも苦手…。そんな方にもちょうどいい、ゆるやかなつながりの場になれば。併設する老人ホームの方にご利用いただいたとき、念々堂を訪れたお子さんや学生さんと、世代を超えた交流が生まれることも期待しています。



## 念々堂の運営について

- 念々堂のご利用は無料です(ドリンク代は別途いただきます)。
- 念々堂の活動を維持するために、ご利用の方は応援金をご支援いただけると幸いです。
- 念々堂では、運営を手伝ってくださるボランティアを募集しています。ご関心のある方はご相談ください。
- 念々堂はボランティアでの運営となりますので、開館日が不規則となったり、短時間になったりすることがありますが、予めご了承ください。
- 念々堂は「まちライブラリー」の活動に参加しています。まちライブラリーとは、本を通して人と人が出会う活動で、全国に展開しています。他のまちライブラリーをめぐってみるのもおもしろいかもしれません。

## 本の寄贈について



- 念々堂では本の寄贈を受け付けています。
- 寄贈していただいた本は原則としてお返しできません。大切な本はご自分でお持ちください。

## ● 念々堂の方針としては、「本を通して人と人がつながる」ということです。

「要らなくなった本」というよりは、「誰かに読んでほしい本」をお願いできたらと思います。「みんなの感想カード」というものを用意しています。もしよかったら、そちらにメッセージを添えてご寄贈ください(書かなくても結構です)。

● 本はどんなジャンルのものでも結構です。現在、小説、絵本、マンガなどが不足していますので、多くにお願いできたらと思います。

● 蔵書できる棚に限りがありますので、お一人五十冊ぐらいまででお願いいたします。また寄贈いただいても配架できない場合もごさいますのでご了承ください。

● 念々堂の運営方針に沿わない本は、お断りさせていただきます。ありがとうございますので、予めご了承ください。



## 念々堂代表インタビュー

念々堂代表 岸上仁氏



一九七六年生まれ。脳神経内科医。真宗大谷派・受念寺副住職。大阪大学大学院にて筋萎縮性側索硬化症(ALS)の研究。内科、脳神経内科の診療に従事。大谷大学仏教学科に編入学、大学院にてインド仏教、唯識思想を研究。現在、神経難病、認知症などの診療、崇信学舎機関誌「崇信」にて「病と生きる」毎月連載。

——今回、私設図書館を開かれるということですが、経緯をお聞かせください。

岸上「そうですね。まず私の祖父である先代の住職の旧家がだいぶ老朽化していて、そろそろ改装しなければという話が出ていました。そのときに、ただ改装するのでは面白くない、新しいことがしたいと

いう思いがあつて、以前より構想があつた私設図書館のことを思い出し、今だ、と思ひ立ちました。」  
——代表はお医者さんですよ。医院の開業ではなくて、なぜ図書館なのでしょうかね？

岸上「それはときどき聞かれます。それは私の医師としての経験にも関係があるかもしれませんが。」

私は脳神経内科医として神経難病の診療に携わってきました。中には大変過酷な経過をたどる方もあります。そんななかで、医学では解けない課題を患者さんからたくさんいただけてきました。もちろん医学は大事な役割を持っています。けれども医学が発達して人間のことが詳しくわかったようですが、一人の人間が、「人間として生きる」ということ、ほんのわずかな側面を見ているに過ぎないということ、とを、患者さんから教えられてきました。

人間はどんなことに行き詰まり、どんな苦しみを抱き、どんなことを喜び、どう生きることが本当に人間としていのちを全うすることなのか。そういう「人間」を学ぶ場所が、医療現場を含め、今の世の中に乏しいことを感じていました。」



——確かに、「生きることを学ぶ」場所は、普段の生活の中にはなかなかないですね。

岸上「そうですね、私自身そういうなかで行き詰まりのようなものを感じていました。医学は問題解決型というか、苦しみを無くそうという発想です。それは当然誰しもそうしたいですが、苦しみのなかを生きなればならないところがあるわけです。苦しみをなくそうとするとする場所では、その苦しみを誰も見てくれない、確かめる場所がないんですね。」

その後、仏教を学びはじめて、先人たちは、そのような人間の苦悩、人間として生きることを、もっ

ともつと学んできたのだと知りました。そうすると、私のことは私が一番知っていると思い込んでいたが、実は私よりも私のことを知っている人がいるのだと感じたんですね。この世界には、私の「思い」の中では到底気づけない、無数の「智慧」がある、と。それなのに、それを知らずに私の「思い」の中に閉じ籠もって過ごしてきたなあ、と実感しました。本にはさまざまな人がそれぞれの人生の営みの中で築いた知がたまっていますし、特に仏教の経典は、人生に苦悩しそれを乗り越えてきた人々の血や汗が「智慧」となって結晶しているものではないかと思っています。」

——本の中に、自分を確かめる場所があるということですかね。

岸上「そうとも言えるかもしれませんが。何を見るかという「知識」も大事ですが、それだけではなく、その見ている視点自体が問われるような「智慧」によって自分自身が問い返されたときに、広い世界を見る眼が開かれるということがあると思います。そういう所で自分が行き詰まっていることを確かめる場所も開かれるんじゃないかと。今の世の中はネットもあって、知識は溢れていますが、そういう自己を深く見つめる学びが乏しくなっているということ、私自身が仏教の学びから教えられました。」

ただ、そういう学びは一人だけでは続けられませんが、やっぱり誰かに促されたりとか、誰かに紹介されて本に出会うということもあつたりします。そういう場にまず自分が身を置きたいということがありました。ですので、さまざまな智慧に触れられ、また本が人をつなぐような図書館を開きたいという思いにいたりしました。」



——なるほど。だから図書館なんですね。では次に「念々堂」の名前の由来を教えてください。

岸上「名前はだいぶ悩みました。最後まで候補にあつたのは「サトリ図書館」でした。むかしお寺に「サトリ幼稚園」という幼稚園が併設していましたので、そこからつけようかと。「サトリ」は仏様が気づかれた内容ですので、それは大事な言葉なのですが、私たちは「マヨイ」の中にもいるので、すこし綺麗すぎる感じもしました。」

そうやって迷っている中で、『仏説無量寿経』に出てくる言葉、「仏仏相念」(仏と仏と相い念じたまえり)という言葉が浮かんできたんです。

——「仏」も「相念」もよくわかりません。

そうですね。文字自体はよく目にしますが、意味がよくわからないですね。そもそも、「仏」というのは、個人の名前ではなく、「目覚めた人」という意味です。「目覚めた」といっても何か特別な境地ではなく、人生のいろいろな困難の中で行き詰まり、苦悩しながらも、いのち尽きる瞬間までのちを輝かせ続け、満ち足りた人生を送った人のことだと私は受けとめています。そんな仏に出会った人が、その姿から生きる勇気をいただいで、自分も仏のように生きたいと願う物語が、仏教の経典に描かれています。つまり満ち足りた人生に出会って、自分も人生を全うしていく、そういう物語です。だから仏も始めから仏なのではなく、仏の姿に出会って自分もまた仏になっていくのです。そういう意味で相い念じるといふことで「相念」です。

——仏様も仏様に出会っていると知りませんでした。

そうなんです。それは別におとぎばなしではなくて、私たちも、本の中の人であっても、目の前の

人であっても、一人の人にただ出会うのではなく、精一杯生きる一人の人間として敬意を持って出会って、その人生に思いを馳せるときに、いろいろな生きたる智慧をいただくということがありますよね。そういう思いの馳せ方が、仏教でいう「念」と関係があるのだと思います。そしてそれが「仏に出会う」という物語が伝えようとしていることにつながるのではないかと思います。

自分のものさしで出会っているうちは、自分の関心に出会っているだけです。でも、自分のものさし自身が問われたとき、自分の関心を越えた広い世界を見る智慧と出会って、生き生きと生きる意欲をいただくということがあります。「念」という言葉、そして仏を念じるといふ「念仏」という言葉にはそんな大事な意味が込められているのだと思います。

——「受念寺」の「念」と併設の老人ホーム「受念館」の「念」もかかっているのですか？

岸上「気づいていただいてありがとうございます。関連の施設だということがわかりやすいかとも思っています。

仏教が開く場所というのは、「よき人」に出会い、人生を支える「智慧」に出会うような場所として大事にされてきたのだと思います。出会った人が生き生きとした歩みを始め、またその人の姿が誰かを歩ませる。そんな出会いを大事にする言葉が「仏仏相念」ということなのだと思います。

智慧を通して人と人となりがつながら、人生のさまざまな問題を一緒に確かめ、生きる意欲を支えあえるような場所。念々堂の地に住んでいた先代の住職は、軽費老人ホーム受念館の開設者でもありますが、そういう場所を目指していたのではないかと思います。その精神を引き継ぎたいという思いもあります。

「念々堂」がその願いに応える場所になればと思っています。



### 念々堂の学習会「念々学舎」

#### 五月スタート



五月から、念々堂の学習会「念々学舎」がスタートします。現在予定している学習会は以下の通りです。

また、イベントや学習会を開催したい方は、ご相談ください。

#### 医学書では学べない認知症のお話

〜認知症を通して「生きること」を学ぶ〜(全6回)

(定員：約20名前後、会費：一回1000円)

認知症を学ぶというより、認知症を通して人間を学ぶ。そんな姿勢で、脳神経内科であり受念寺副住職でもある岸上仁医師が、認知症診療のなかでいただいた課題を、仏教の視点を通して考えます。

《日程》午後二時〜三時

五月十一日(土) 認知症から何を学ぶか・認知症の診断

六月八日(土) 記憶障害・見当識障害

七月二日(土) 失語、失行、失認

九月二十一日(土) 意欲低下

十月十二日(土) 介護への抵抗、幻覚・妄想

十一月三十日(土) 認知症の治療

\*日程や内容は変更することがありますので、ホームページやメールのご案内をご確認ください。

#### 家庭介護教室(全6回)

(定員：約20名前後、会費：一回1000円)

介護講師・平田晃之先生に、家庭で役立つ介護の基本をわかりやすく教えていただきます。

《日程》午後二時〜三時

五月十八日(土) ①移動介助(実技)②ボディメカニクス(お話)

六月十五日(土) ①食事介助(お話)②更衣介助(実技)

七月十三日(土) 移乗介助その1(実技)

九月十四日(土) 移乗介助その2(実技)

十月五日(土) 排泄介助(実技)

十一月十六日(土) ①入浴介助(実技)②感染対策(お話)

\*日程や内容は変更することがありますので、ホームページやメールのご案内をご確認ください。

#### 仏教書の輪読会(原則第四金曜日)

(定員：約10名前後、会費：一回500円)

輪読会とは、数行ずつ、かわるがわるに音読して、本の内容について吟味したり語り合ったりする会のことです。

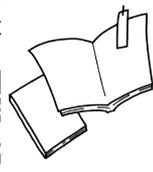
今回は、宮下晴輝先生の「仏教は何を教えるのかー生老病死の中でー」を選びました。お釈迦さまが課題とされたことを平易な言葉で語っておられます。受念寺副住職(岸上仁)が皆さんと一緒に読んでいきます。

《日程》

初回 五月三十一日(金) 午後二時〜

以降はその都度調整します。

\*ご予約は下のQRコード、もしくは念々堂ホームページの「イベントのお知らせ」からお申し込みください。ネットをされない場合は、現地で直接お尋ねください。



#### 念々堂会員登録

開館日やイベントの予定をメールやLINEでお知らせしますので、QRコードからご登録ください。

メール ↓ LINE ↓



(文責：岸上仁)